

知的障害者更生施設在住の重度知的障害者への音楽療法 —鍵盤楽器の有効性について—

The Use of Music in the Treatment of person handicapping brains of A Medical Rehabilitation Center Especially the Usage of A Keyboard Instrument

(2000年3月31日受理)

土谷 由美子
Yumiko Tsuchiya

Key words : 知的障害者更生施設, 音楽療法, 鍵盤楽器

はじめに

障害を持つ人の症状や機能の低下を少しでも緩和し、また、その人が味わう苦しみや悩みをできるだけ軽減し、彼らの生きにくさのもとを除去するための一つとして音楽療法で試みた。

従来、音楽療法は、身体的機能障害を持つ対象、言語的あるいは情緒的交流の乏しい対象、感情に障害を持つ対象、精神発達遅滞あるいは何等かの発達障害を持つ対象、自我機能の部分的障害あるいは退行を示す対象に試みられ、主に情緒面での効果が示されている(松井, 1980)。

重度障害者と接することで切実な問題は、コミュニケーション能力に限界があるという事である。一対一の個人セッションにどのような手段でコミュニケーションをすればよいのか不安であったが、同じ人間同士として向かい合い、関わりを大切にしていけば様々な感情経験を得ることができるであろう。

そこで、土谷・小野(1998)は痴呆性老人への音楽セッションにおける「馴染みの歌」の効果を検討した。その結果、発話量、社会的行動の直接的行動が増加することが示された。そのことから社会的行動が知的障害者へもあてはまるのではないかと思った。

そこで、個人のニーズに合った鍵盤楽器のピアノを使い援助することで情緒の安定を図り生きがいのある生活を過せ、やる気、能力を十分引き出すことにつながった経過を報告しその有効性と今後の問題点を検討する。

対象及び方法

1. 対象

・対象者の概要と特徴

氏名 I. M. 性別 男性 年齢 45歳 IQ 24

在施設期間 25年 日常会話 二、三語文は理解可能 ALD面 ほぼ自立

特徴は、普通は温和で笑顔も多く自ら職員、利用者に話しかける反面、頑固で自分の意思が通らないとかんしゃくを起こしてしまう。

2. 経過及び方法

ピアノを弾き始めたのは、少時の頃姉が練習している横でおもちゃのピアノで遊んでいたことがきっかけとなる。楽譜を読むことはできないが、視覚・聴覚・触覚の三つの感覚刺激により、童謡や、青春時代に覚えた曲を弾くことができた。

昭和63年から平成7年頃までは、自分の家の近くのピアノ教室へ外出という形で両親と一緒に通っていた。毎月2回の教室へ行くことが生活のリズムになり、両親と一緒にのバスでの外出が楽しみになっていたが、担当者の死亡により教室へ行くのが中断してしまった。

それから散歩、作業に出られなくなり、入浴も拒否したり、昼夜逆転し夜眠らない、トイレがわからず失尿する、長袖の上に半袖を着たりズボンの上から下着を着けるなど、日中活動への参加および生活全般にわたって意欲が失われてきた。

もう一度生きるために必要な能力をピアノ演奏を通して養いたいとIさん、両親、職員とで話し合い、平成10年10月より毎月2回施設内での演奏活動を開始した。

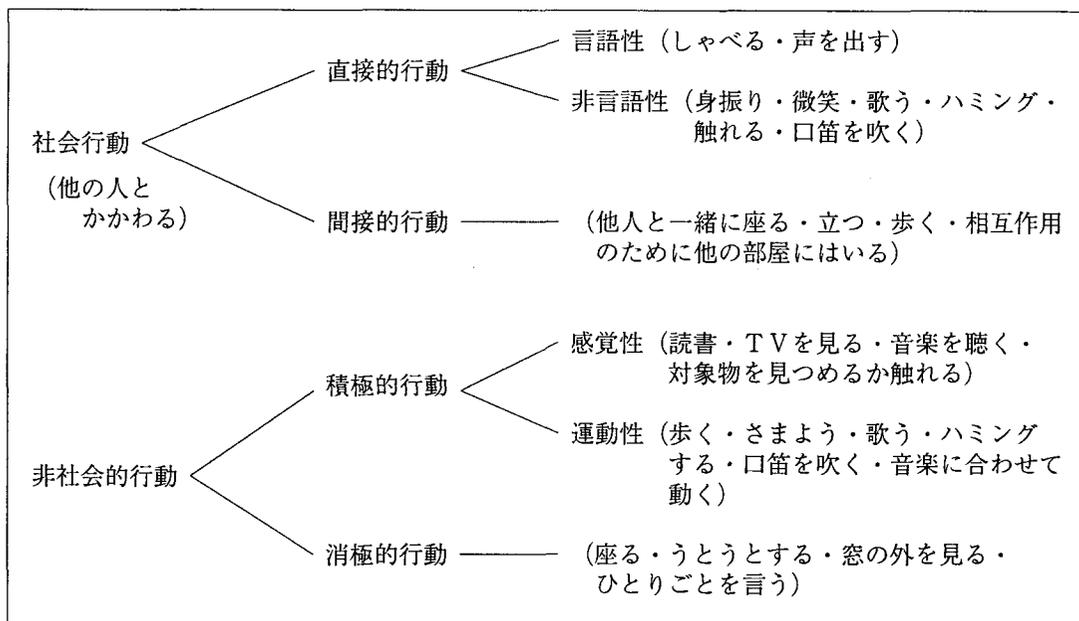
Iさんも好きなピアノでの演奏活動が始まり、よい方向に向かいかけた矢先、母親の突然の死亡にショックを受け『母』に関する曲が多くなるが、時間の経過と共に元気を取り戻し、気持ちの変化が現われて、「グランドピアノで演奏したいなあ。」と度々言うようになり、平成11年5月より外出してグランドピアノでの演奏活動が始まった。

演奏活動は持っている能力なども考慮した上で段階にそって進めた。まずは音楽療法が心理療法の一種だということで、井村恒郎の四つの分類の中から

- 1 支持法—不適応を起こしている患者さんに力を貸すことで、安心、説得、再保証、励まし、助言などをするのである。
- 2 表現法—患者さんの内面に抑圧されている不満や、悔しさや、葛藤を治療者に聞いてもらうことで発散させる方法である。

この2つの精神療法的音楽療法で対応することと、社会的行動は、PollackとNamazi (1992)の行動チェックリスト(表1に示す)に従い、5分間の対象者の行動を10秒毎のインターバルレコーディング法によって記録する。

表1. Pollack と Namazi の行動チェックリスト



結 果

1. 第1期 (平成10年10月～12月 6回)

この期間は、ピアノ活動が中断してから、施設での日課に添ったり施設の活動に参加することができず、一日中ベットに横になっていたため、基本的に演奏する曲を思い出すことと、行動観察を実施した。施設へ訪問し、まず迎えに行くことから始め、「おはようございます」と言う目線を合わさず「おはよう」と答えてあとは無言のままピアノが置いてある部屋へ行く。ピアノに向かうと自己中心的なピアノの弾き方で、自己とピアノのみの関係で会話もなかった。終わって帰るときも「さようなら」と言うのと下を見たりして目線を合わせてくれず「さようなら」と言ったり、無言であったり、職員の方が「Iさん、ありがとうございますと言いましょ」と言うと、聞き取れないくらいの声ではそぼそと言う状態であったが、徐々に挨拶ができるようになり「このピアノはアップライト。うちにも2台ある。」とか「パイプオルガンもあるで」としゃべってくれるようになったり、聴いてわからない曲の曲名を聞いても答えてくれないので、一曲一曲を弾き終わるたびに拍手をしてあげるようにした。それは、自分の演奏を聴いてもらって人から喝采されることが満足感につながっていきけるようにしたかったからである。回を重ねるごとに挨拶も目線も合わせたり合わせなかったりではあるができるようになり、こちらを見て「スカートじゃ」「ズボンじゃ」と言ってくれコミュニケーションがとれるようになった。

2. 第2期（平成11年1月～4月 8回）

この時期は、お正月に母の突然の死亡という最大のショック状態で始まり、表情も最初の頃と同じようになり、「おかあちゃん死んだ。」「おかあちゃん死んだ。」と何度も言い弾く曲目も『母』に関するものをくりかえして何度も弾くという母親に対する想いをピアノで紛らわしていた。ピアノも自分の部屋の近くに置いてある古い調律もしていないピアノを弾き出した。情緒の安定が図れるように暖かくかわりをもてるように接し、問題に合わせて柔軟にピアノ曲を持っていった。2月終りから3月頃になると別の棟にあるピアノの部屋にいき演奏できるようになりピアノについている布を見て「これは赤。」「これは緑。」と教えてくれたり、「うちのはアップライト。」「2台ある。」とか、知らない曲を弾いたとき「今の曲は何と言う曲ですか。」と聴くと「鐘の鳴る丘じゃ。」と教えてくれるようになりスムーズな会話ができるようになってきた。他の利用者が入って来たとき「Aちゃんがきた。Aちゃんじゃ。」と教えてくれ「Aちゃんに聴かせてあげようね。」と言うと得意になり表情豊かな弾き方になり、自己表現ができるようになった。

3. 第3期（平成11年5月～10月 12回）

この時期は、施設外でのピアノ活動をする事になり、新鮮な気持ちになれ、念願のグランドピアノを弾くことが実現した。さらに送迎にタクシーを使いタクシー料金の支払いも自分でできるようになり、社会的活動がスムーズに行えるようになった。信頼関係も深まり、施設からタクシーに乗ってきて、家の玄関まで歩きブザーを鳴らし、「どうぞ。」と言うと入ってき入ったらすぐ目を見ながら「おはよう。」と言ひ「スカートじゃ。」「ズボンじゃ。」と服装の観察ができるようになり、スカートだとうれしいようだ。曲のレパートリーもたくさん思い出せるようになってきたので、こちらから曲名を言いその曲を弾くという形をとったり、こちらがいろんな曲を弾いて何の曲か聞いたり、曲のリズムを変えてみたりした。さらに対話を楽しめるように、一曲ごと弾き終わった後、拍手をし「今の曲は何の曲ですか。」と言うと「トルコマーチじゃな。」と曲名を確認しながら教えてくれたり、「ほしひゅうま。」と歌の中の歌詞で答えてくれるようになった。だんだんこちらをからかうようにわざとわからない曲や曲と曲を組み合わせたことをして「これわかる。わからん。」と聞いてきたり「わからないよ。」と答えると「わからんなあ。」と嬉しそうな顔をして、楽しそうに言う。曲名を言ってもらった後「誰が歌っているのかな。」と聞くと「ひばり。」とか「森昌子。」と答え、自分が忘れて誰だかわからないときは「おにいちゃん。」「おねえちゃん。」男性歌手や女性歌手のことかと思ったら、自分の兄や姉のことだったりする。こちらの弾く曲も一生懸命覚えようと何度も「あれ。」「あれ。」と言ひながら交互に弾いてみたり曲の途中でふとわからなくなったときも「あれ。」と助けを求め、側から弾いてあげると思い出す。7月頃からはピアノの椅子に座るとすぐ弾く曲は『トルコ行進曲』時間がきて「もう終わりです。」と言うと『蛍の光』を弾くことに本人の中で決められてきた。曲に合わせて歌も歌えるようになった。自然に“荒城の月”や“お馬の親子”“みかんの花咲く丘”などに弾き歌いを始めた。リズムを変えておもしろく弾いてみたり、終わり方を強くしたり弱くしたり変化もつけられるようになった。一曲一

曲に感情をこめて弾けるようになった。施設内では一度も見せたことのないような真剣な顔や嬉しそうな笑顔を見せてくれて驚いている。

*セッション後の社会的行動について

Iさんのセッション後の行動をPollackとNamaziの行動リストを基に評定した。図1に社会的行動の推移を示す。

社会的直接行動は、第1期に比較して第2期、第3期において増加がみられた。

社会的間接的行動は15回目のセッションにおいてみられた。これはお茶を一緒に飲むという行動であった。

非社会的消極的行動は1

回目、2回目、7回目のセッションにおいてみられた。外を見てボーとするなどの行動であったが、セッションの回が進むにつれて見られなくなった。

また、非社会的積極的行動は見られなかった。

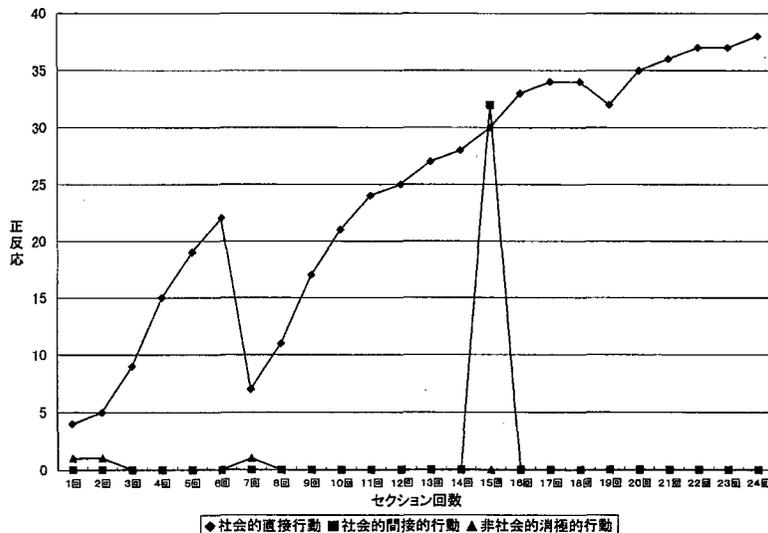


図1 対象者の社会的行動の推移

Iさんの演奏する曲目リスト

・さくら	・ふるさと	・春の小川	・みかんの花咲く丘	・ペチカ
・荒城の月	・おぼろ月夜	・トロイカ	・浜千鳥	・八十八夜
・城ヶ島の雨	・スキー	・雪の降る町を	・四季の歌	・赤とんぼ
・我は海の子	・母さんの歌	・旅愁	・鉄腕アトム	・蛍の光
・ドラエモン	・ピクニック	・小さい秋みつけた	・ハメハメハ大王	・青葉の笛
・君が代	・巨人の星	・一週間	・おお牧場はみどり	・鐘の鳴る丘
・高校三年生	・せんせい	・線路は続くよどこまでも	・手のひらを太陽に	・学生時代
・雪山賛歌	・浜辺の歌	・里の秋	・人を恋する唄	・追憶
・知床旅情	・箱根八里	・同期の桜	・予科連のうた	・戦友
・露営の歌	・青い山脈	・北の宿から	・お久しぶりね	・柔
・矢切りの渡し	・くちなしの花	・星影のワルツ	・ついてくるかい	・帰ってこいよ
・山男の歌	・赤い灯青い灯	・おどしき小唄	・夜の新宿	・出船

- | | | | | |
|---------|-------------|--------------|------------|---------|
| ・悲しい酒 | ・影をしたいて | ・嫁に来ないか | ・よこはまたそがれ | ・もしかして |
| ・恋の季節 | ・海に抱かれて | ・川は流れる | ・ブルーライト横浜 | ・旅の夜風 |
| ・私の城下町 | ・瀬戸の花嫁 | ・心のこり | ・おふくろさん | ・君恋し |
| ・うそ | ・お母さん | ・王将 | ・夜明けの停車場 | ・黒田節 |
| ・南国土佐 | ・船頭小唄 | ・あなたの灯 | ・雨の御堂筋 | ・涙の操 |
| ・いい湯だな | ・上を向いて歩こう | ・愛は勝つ | ・犬のおまわりさん | ・喝采 |
| ・炭坑節 | ・金魚のひるね | ・青い目の人形 | ・かもめの水兵さん | ・たきび |
| ・海 | ・おもちゃのマーチ | ・むすんでひらいて | ・おててつないで | ・七夕 |
| ・兎と亀 | ・金太郎 | ・浦島太郎 | ・歌を忘れたカナリヤ | ・桃太郎 |
| ・七つの子 | ・こいのぼり | ・てるてる坊主 | ・おつかいありさん | ・月の砂漠 |
| ・お馬の親子 | ・ねこふんじゃった | ・こがねむし | ・赤い靴 | ・雨 |
| ・さっちゃん | ・ゆりかごの唄 | ・ちょうちょ | ・村の渡しの船頭 | ・花嫁人形 |
| ・待ちぼうけ | ・ひなまつり | ・雪やこんこん | ・どじょっこふなっこ | ・ジングルベル |
| ・お正月 | ・きよしこの夜 | ・チューリップ | ・とんぼのめがね | ・ぞうさん |
| ・かたつむり | ・夕焼け小焼け | ・めだかの学校 | ・どんぐりころころ | ・しゃぼん玉 |
| ・春がきた | ・ないしょの話 | ・靴がなる | ・手をたたきましよう | ・春よこい |
| ・はち | ・歌の町 | ・かわいい魚屋さん | ・かわいいかくれんぼ | ・十五夜 |
| ・月 | ・日の丸 | ・おばけのQ太郎 | ・笑いましょ | ・茶摘み |
| ・もみじ | ・富士の山 | ・子犬のマーチ | ・エリーゼのために | ・アイアイ |
| ・トルコマーチ | ・しょじょ寺の狸ばやし | ・おもちゃのチャチャチャ | | |

考 察

知的障害者更生施設在住の重度知的障害者に対して、鍵盤楽器を使用して馴染みの曲での音楽セッションを24回実施し、その効果が検討された。本例では、セッション後の社会的行動の直接的行動は増加した。

このことから鍵盤楽器を使用して馴染みの曲での音楽セッションが障害者更生施設在住の重度知的障害者において社会的行動の直接的行動の増大に有効であることが示された。

間を取りながらのゆったりとしたセッションで、一曲弾いた後次の曲に入る時何を弾こうか考えて沈黙になったときに、Iさんの表情が読み取りやすくなった。自分のゆとりプラスIさんの表情、感情の動き、反応を見ることにもつながった。

このセッションで経験したことからも言えることなのですが、自分自身を落ち着けて相手を感じ取ることに集中するとき、その直感がより冴えてくるようだ。そして、より相手に伝えやすくなるような気がした。心にゆとりができた時、自分と相手のあいだに相互交流が生まれてきた。相互交

流の契機は自分と相手の表現に対応することから始まるので対応のしかたを考えた。

第一にIさんの表現する音、演奏そのものに対応することである。例えば、Iさんの弾くピアノの音のリズム、テンポに合わせて連弾してみる。Iさんのリズムにもっと違ったリズムを重ねてみる。または、歌ってみるという対応をする。

第二にIさんの演奏する曲の中で表情、動きを観る、雰囲気を感じることから内面へ対応することである。Iさんの内面はその日の自発性、気分、感情、そして自分の演奏に耳をかたむけ、演奏している曲に十分入り込めるほど楽しんでいるかということである。さらに、相互交流の際に大切にしていることは、Iさんの変化の意味を感じ取ることができること、Iさんがいつも変わってくることを求めるような性急な気持ちを捨て、流れに身をまかせるようなゆったりとした気持ちでいるようにしたい。

個別援助をする過程で、生活の場である施設においても失われていた意欲が戻り始め、自ら活動にも参加できるようになり、進んで係活動やグループ内の役割分担に取り組むようになり、褒められることでどんどん自信をつけ、元気な笑顔が見られるようになった。今回のような変化が見られたことは、施設内での個々のニーズに合わせて取り組んできた成果である。

今後の課題としては、音楽セッションの知見を対象者の処遇目標、状況に合わせて適用していくことと、新しい曲が心の中に根づくように繰り返しアプローチをしていくことが挙げられる。

参 考 文 献

松井紀和：音楽療法の手引き—音楽療法家のための—，牧野出版，1980.

McCloskey, L, J.: Music and the Frail Elderly; Activities, Adaptation and Aging, 7, 1985.

Prikett, Carol A., Moole Randall S. "The Use of Music to Aid Memory of Alzheimer's Patients"; Journal of Music Therapy, 28(2)1991.

Pollack, Namazi, Kevan H.; "The Effect of Music Participation on the Social Behavior of Alzheimer's Disease Patients"; Journal of Music Therapy, 29(1), 1992.

高橋多喜子，杉山雅彦：痴呆性老人の社会的行動に関する音楽効果の検討；日本バイオミュージック学会誌，12，1994.

桜林 仁：音楽療法研究，第一線からの報告，音楽の友社，1996.

土谷由美子，小野昌彦：特別養護老人ホーム在住の痴呆老人への音楽療法；紀要第29号，1998.

加藤美知子：音楽療法の実践—日米の現場から—，星和書店，1998.

村井靖児：音楽療法の基礎，音楽の友社，1998.